

環境学の

授業発見!

理学、工学、人文社会科学、異なる専門領域の学生がともに学ぶ環境学研究科ならではの授業です。



丸山先生

【今回の授業】 **科学技術社会論ゼミ** 社会環境学専攻 丸山 康司 教授

科学技術なくして成り立たない現代社会。さまざまな技術が私たちの生活とともにあって、多大な利便性をもたらしている。しかし同時にリスクも伴う。そうした**科学技術と社会の境界領域を扱うのが科学技術社会論**。「**技術を取り入れるときの、社会的な影響を考えていきます**」と丸山先生。

課題は狭い意味でのリスクだけではなく、社会のあり方そのものに及ぶこともある。例えば医療技術。人工呼吸器や出生前診断など技術が進むことで選択が迫られ、医療を継続するか放棄するか意思決定にゆだねられることになる。例えば農業。環境への影響が懸念されるが、一方で食料の生産性を飛躍的に向上させた。例えば自動運転技術。人間が運転するより安全なレベルまで進んでいるが、究極の場面で歩行者を守るか運転者を守るか、どうプログラミングするのか。科学技術は常に倫理的、法的、社会的な問題を突きつけると語る。

ゼミでは、持続可能な社会を実現するうえで欠かせない科学技術の可能性と、社会的に制御する方策について、具体的な事例をもとに、データと論証に基づきディスカッションする。**新型コロナウイルスも最新のテーマに。「科学に不確実性があることを前提として、自粛や都市封鎖をどう意思決定するのか。科学的な議論とは何かを考える機会になった」。**

4月から続いているリモート授業では、日本に戻れなくなった留学生も母国から、これまで通り参加する。リモートのメリットを感じながらも、身体を介在させず大勢の人とつながるネットワークは、これからどんな問題が出てくるのだろうと、丸山先生は言う。これからの社会に生きる学生たちに気づきを促している。



山田 理恵さん Yamada Rie
社会環境学専攻

地球温暖化問題、食の安全安心、風車と騒音、原発問題、最近ならば新型コロナウイルス対策……。授業で議論するテーマは多岐にわたります。でも、根底を流れる問いは「**科学に問うことはできるが、科学だけでは答えられない問題**」に私たちはいかに向き合うべきか、です。

学生は、自分の興味やテーマに沿った文献を複数選び批評する機会と自身の研究について話す計2回の発表の場があります。大学卒業したての日本人、留学生、社会人らさまざまな立場の学生が、自身の経験や文化的背景をもとに熱い議論を交わします。科学技術の進化が引き起こす社会問題は、関係する人やモノが広大で、将来予測が難しく、取り返しのつかない事態を起こすこともあります。直面する難問に、学生たちは頭を抱えてしまいます。そんな時、ニコニコ静かに聞いていた先生は、こんがらがった私たちの議論を解きほぐし、「科学と社会」について考えるヒントを与えてくれます。